東京大学哲学研究室『論集』40号（2021年度）
pp. 49-62

C. I. ルイスのメタ倫理学と「善き生（good life）」

―認知主義・自然主義的実在論から規範倫理へ―

飯塚　舜

メタ倫理学におけるプラグマティズムといえばおそらく、リチャード・ローティのネオ・プラグマティズムを念頭に、静寂主義（quietism）、すなわち道徳的事実や道徳的真理を問題にすべきではないとする主張がまず想起されるだろう（cf. バッジーニ・フォスル 2012, 90–92; 佐藤 2017, 190–192）。しかし、メタ倫理学におけるローティの立ち位置は、必ずしもプラグマティズムを代表するものではない。セピーリの整理によれば、ローティ流の静寂主義はプラグマティスト的なメタ倫理学説の中でも相当にラディカルなものである（Sepielli 2017, 588–590）[1]。パース、ジェームズ、デューイという古典的プラグマティストの系譜において道徳的真理が重大な関心事の一つであったように、静寂主義は必ずしもプラグマティズムを特徴づける中心的主張とは言えない。

近年、プラグマティズムの伝統が持つメタ倫理学における豊かな蓄積を再評価するプロジェクトが盛り上がりを見せつつある（cf. Pihlström 2005; Heney 2016）。中でも、最も体系的に倫理学の構築を試みたプラグマティストの一人であるクラレンス・アーヴィング・ルイスの認知主義・自然主義は注目に値するだろう。

本稿の目的は、ルイスのメタ倫理学上の見解を評価することによって、静寂主義とは異なるプラグマティズムの一側面に光を当てることである。評価にあたっては、認知主義及び自然主義的実在論に向けられる主要な批判を試金石として、ルイスの立場からどのように応じられるか検討する[2]。ルイスのメタ倫理学説を評価することで明らかになるのは、規範倫理上の見解へのコミットメントによって、彼のメタ倫理学上の立場が強力なものになっているということである。このため本稿では最後に、彼の規範倫理学を評価する足がかりとして、「善き生（good life）」という概念に注目して彼の構想をスケッチする。そこでは、ルイスの規範的主張に見るべきところはないという従来の評価（Murphey 2005; Dayton 2006, 18）に反して、その現代的意義が示されるだろう。これは本稿の副次的な目的でもある。

ルイスのメタ倫理学説を理解するにあたって最も重要なテキストは、1946年に刊行された『知識と評価の分析（*An Analysis of Knowledge and Valuation; AKV*）』、特

にその第3巻「評価」（”Book III: Valuation”）である。ルイス自身が「倫理学へのプロレゴメナ（prolegemena to ethics）」（AKV 540）と位置づけるように、この著作で行われるのは、倫理学の構築に向けた予備的な考察である。しかしルイスはAKVを著した後、その倫理学体系の書を完成させることなく世を去っている。こうした事情により私たちは、このプロレゴメナとその他いくつかの小品と遺稿を頼りに彼の構想を推し量るよりほかない[3]。

本稿ではまず、ルイスのメタ倫理学説の特徴を明らかにする。特に第1節では、価値判断の本性に関する彼の立場を一種の認知主義として提示し、価値述定の3区分を手がかりとして彼が取り組む問題の所在を明らかにする。第2節では、ルイスが価値、特に客観的価値とは何であると考えているのかを明らかにすることで、その自然主義的実在論のうちに認知主義の根拠を探る。さらに第3節では、そのような価値を目指すべき理由の説明を見ることで、価値の理論と倫理学を架橋する構想を明らかにする。ここでは同時に、規範倫理へのコミットメントが確認される。その上で第4節では、認知主義及び（自然主義的）実在論一般に対する主要な批判を検討し、ルイス的な応答を考えることで、彼のメタ倫理学説の長短を見定める。ここでは、相対性からの錯誤説論証と発生論的暴露論証を検討し、これらの論点への応答可能性が、ルイスの規範倫理上の主張によって確保されていることを明らかにする。最終節では彼の主張を評価する準備として、彼が批判する功利主義との異同を見ることを通して彼の規範倫理の構想を素描する。

１．価値判断の認知主義

> 評価（evaluation）とは経験的知識の一形態であり、その真偽を決めるのは何か、その妥当性と正当化を決めるのは何かという点で、他の種類の経験的知識と根本的には異ならない。（AKV 365）

AKV第3巻の冒頭を飾るこの一文は、ルイスの認知主義、すなわち価値判断は他の性質に関する判断と同様に真偽や正当性を問うことができるという主張を端的に表している。彼に従えば、りんごを食べて「このりんごは甘い」と判断することと「このりんごは味がよい」と判断することの間に質的な違いはない。この主張のために必要なのは、価値判断とその他の性質に関する判断はどのような本質的な点で同じであり、それにも関わらず表層的に異なる種類の判断に見えるのはなぜかを説明することである。これが、ルイスの認知主義が取り組む課題となる。

まずルイスによれば、真なる価値判断と偽なる価値判断を区別する基準が存在し、価値判断は検証可能である。さらに、価値判断とは経験的認知の一種であり、可謬的である（AKV 398–400）。価値判断は他の経験的判断と根本的に異ならないと言われるのは、これらの点においてである。

それではなぜ価値判断がこうした特性を持つと言えるのか。ルイスの説明は価値述定（value-predication）を 3 つに区分することから始まる。価値に言及する言明を、彼は価値述定と総称する。第 1 種の価値述定は、表現的言明（expressive statement）である（AKV 374）。表現的言明とは、直接的な経験に見出される価値性質（value-quality）の報告である[4]。例えば、音楽を鑑賞したり料理を口にしたりしたときの「これいいね（”This is good.”）」といった発言がこれにあたる[5]。次節で見るように、表現的言明が表す直接的な価値性質は「内在的価値（intrinsic value）」と呼ばれるが（AKV 382）、これは他の種類の価値を説明する基礎的な概念である。

第 2 種の価値述定は、内在的価値が実現する可能性の予想である（AKV 375）。料理を目の前にして「これを食べれば、私はそれを楽しむだろう」と述べることはこの種の価値述定である。こうした予想は「もし〜すれば…になるだろう」という形式で表される「打ち切り判断（terminating judgments）」であり（AKV 205）、経験的なテストによる検証を受け入れる[6]。この点で、内在的価値の予想は「これを食べれば満腹になるだろう」といった判断と同じく可謬的かつ検証可能である。

最後の種類は、客観的価値の判断である（AKV 375）。これは価値という客観的な性質を対象に帰属する「非打ち切り判断（non-terminating judgments）」（AKV 181）の一種である。客観的価値の判断は検証を受け入れる。しかし他の性質に関する非打ち切り判断と同様に、どの時点においても決定的かつ完全に検証されることはなく、常に新たな経験によって、さらに検証される可能性を持つ（AKV 376）。

中でも検討を要するのは、第 3 種の価値述定であろう。価値判断とその他の判断の同質性と見かけ上の異質さ、そしてその可謬性や検証可能性の説明が問題となるのは明らかに、客観的価値の判断を考える場合だからである。問題に答えるにはまず、客観的価値とは何かを問わなければならない。次節では価値に関するルイスの自然主義的実在論の主張を概観した上で、再びこれらの問題を考える。

２．価値の自然主義的実在論

> 事物のうちの客観的価値は、経験における善さ（good）の可能性によるものである。（AKV 389）

> 対象の持つ、経験における直接の価値の可能な実現の潜在性（potentiality）に存する価値の他に、客観的存在のうちにはいかなる種類の価値もあり得ない。（AKV 413）

ルイスによれば、何かが客観的に価値を持つとは、もしそれが現れれば内在的価値が実現するだろうということ、あるいはそのような価値を持つ他の対象を生み出すだろうということ、これらいずれかである[7]。内在的価値とは直接に経験される価値性質であり、端的に「善さ」（AKV 405）あるいは「楽しみ（enjoyment）」「満足（satisfaction）」（AKV 410）などと言い換えられる基礎的な概念である。ここで注意を要するのは誰の経験において内在的価値を実現する可能性があるとき、対象は客観的価値を持つと言えるのかという点であるが、ルイスによれば、客観的価値を判断する際にたいてい意図されているのは、「問題になっている事物に影響され得るすべての人々の観点」（AKV 394）からの価値帰属である[8]。

ルイスのこうした見解はまず、価値が客観的に存在すると主張する点で実在論である。さらに、客観的価値を内在的価値、つまり直接に経験される価値性質とその実現可能性、そしてそうした価値を持つ事物を生じさせる傾向性という自然な性質に還元する点で、ルイス自身の称する通り自然主義である（AKV 398）。

彼の提示する自然主義的実在論によって、残されていた問題に答えることができる。まず客観的価値判断の検証は、様々な状況で様々な人に対して対象が内在的価値を実現する可能性について、一つひとつの打ち切り判断を検証することで進めることができる[9]。このことは、非打ち切り判断はいくつかの打ち切り判断に還元できるという一般的な特徴づけ（AKV 184, 376）とも符合する。ただし、客観的価値判断の検証が完了することはない。検証すべき打ち切り判断は無尽蔵であり、常にさらなる検証の余地があるためである（AKV 176–177）。

また価値判断の可謬性は次のように説明できる。まず特定の状況で特定の人が内在的価値を経験したからといって、対象に客観的価値があると直ちに言えるわけではない。確かに客観的価値は内在的価値の実現可能性によって説明されるのであり、また内在的価値の表現的言明は誤り得ないが、内在的価値の経験は客観的価値を判断するための決定的ではない証拠の一つに過ぎない。例えば、ある絵画を見ていい絵だと思ったとする。その絵画によさを感じたのは、照明の条件が悪く、未熟な細部が隠れていたためであった。このとき、いい絵だと感じた経験を根拠としてその絵に客観的な価値を帰属しようとすることは誤りである（AKV 410–411）。対象そのものと無関係な状況や、判断主体の気質や態度によって、内

在的価値が誤った客観的価値判断を導くこともあり得るのである（AKV 415–416）。

客観的価値判断のこうした特徴は、経験的判断一般に当てはまる。それでも価値判断とその他の性質の判断が異質に見えるのは、いくつかの周辺的な事情のためである。第一に、経験における価値性質の現れは、対象が同じであっても、状況や経験主体によって変化しやすい（AKV 418）。第二に、そうした経験に基づく価値判断の相違は他の経験的判断の場合よりも発見されやすく、発見された場合には注目を集めやすい。例えば、多くの人が「緑」と呼ぶ色が「赤」に、「赤」が「緑」に見える人がいるとする。彼は他の人が「緑」と言うのと同種の状況で「緑」と言うことを学ぶだろう。このため、彼の視覚の特異さは容易に気づかれない。対して「善い」「悪い」の感じ方が特異な人は、その違いを言語使用に反映する可能性が高い。他の人に自らの価値観を尊重させるためには、そうすることが必要だからである。また仮に彼が通常の言語使用に従うとしても、彼の行為は彼の感じる限りでの善し悪しに左右されるため、その相違は発見されやすい（AKV 418–419）。価値判断と他の性質に関する判断のこうした違いは、それらを本質的に異なるものにはしないが、見かけ上ひどく隔たったものに見せるのである。

３．価値から道徳へ

ルイスの認知主義は、彼の自然主義的実在論によって完成する。ただしここまで見てきたのは価値の理論であり、これが倫理学の理論であるためにはいま一歩の、しかし困難を伴う橋渡しが必要である。デイトンが指摘するように、ルイスはこのプロジェクトを完遂することができず、道半ばで挫折している（Dayton 2006, 22–23）。遺された間隙は深く、これを埋めることは本稿の手に余る。そのため以下ではさしあたり、ルイスの狙いを明らかにすることに努めたい。

ルイスの整理に従えば、ある行為が合理的であるのは、意図された結果に価値を帰属できるときである（AKV 367）[10]。したがって、行為の合理性を問うことができるからには、価値判断には真偽があり、その真偽は検証可能性に開かれているはずである（AKV 399–400）。しかし価値判断が検証可能な真偽を持つだけでは、私たちの行為が合理的である可能性は担保されない。価値を目指すことが合理的であるのは、「将来にわたって、全体として、自らに関心を持て」という「定言的命令（categorical imperative）」のためである（AKV 481）[11]。この命令は、通時的な全体としての「善き生」を合理的関心の対象にする（AKV 483）。一つひとつの場面で価値を実現しようと行為することは、それが善き生に貢献すると期待される

がゆえに合理的なのである。

こうした命令が定言的に与えられるという主張には、明らかに論争の余地がある。しかし定言的命令の根拠の背景には、『心と世界の秩序（*Mind and the World-Order*）』やそれ以前の論考からAKV第1巻にまで引き継がれる、ア・プリオリなものに関する長大な議論があり、本稿でそのすべてを追うことはできない。それでもここで強調しておくべきことがあるとすれば、ルイスの言う「定言的」「ア・プリオリ」といった表現には特有の意味があり、彼の姿勢は絶対的な根本命題へと様々な主張を根拠付けようと試みる基礎付け主義とは一線を画すということである。彼にとってア・プリオリなものとは、経験を理解するために必要であるものの、人間の持つ傾向性や知的な利便性による制約の中で複数から選択する余地があり、改訂を受け入れるような枠組みである。(Lewis 1970[1923], 233, 237–239)。現在問題となっているのは自らの生の全体を配慮せよという命令であるが、これが定言的であると言われるのは、それがなければあらゆる種類の「理由（reason）」が不可能になってしまうからに他ならない（AKV 481）。

この命令を受け入れるとしても、それだけではまだ客観的価値、つまり他者の経験において内在的価値が実現する可能性を考慮に入れた価値を目指すべきことは支持されない。例えばルイスは後年の論考において、人類は原罪を背負っているため全滅させるべきだと判断する人物の価値判断は嘆くべきものだと述べている（Lewis 1970[1950], 175）。次がその根拠である。

> 問題とはすなわち、そこで考えられている行為を達成することは、［その行為によって］影響を受ける生を、彼らにとって満足のいくものにすることに資するだろう（will or would）か、ということである。［…］決定しなければならない行為の選択肢が自らや他者にもたらす価値結果（value-effects）を考慮することなしには、すべきことは何か決定することは誰にもできない。（Lewis 1950[1970], 175；［］内は筆者による。）

つまり、ある行為が道徳的に是認されるためには、自分自身のみならず、他者にとっての価値、そして他者の生への配慮も必要とされるのである。

「他者に関心を持て」というこの命令はそれ自体定言的に与えられるのか、あるいは「自らに関心を持て」という命令から導かれるのか。この点に関するルイスの見解には解釈の余地がある。上記の引用箇所は、他者の考慮は行為の決定という日常的実践が成立するために不可欠であると述べており、命令が定言的であ

ることを支持しているように見える。他方で AKV のルイスは、他者の経験における価値実現を目指して行為することには、それ自体で自分自身にとっての内在的価値が備わっており、他者に配慮せよという命令に従うことは「外的な（alien）目的への個人の隷属を示すのではなく、むしろ一人称的経験において見出し得る善さを創出することでもありえる」と述べている（AKV 502）。ここには、他者に関心を持てという命令が、自らに関心を持つことを命じる定言的命令から導出されることへの期待が窺える。これらの解釈にここで決着をつけることはできない。しかしいずれにしても、「自らと他者に関心を持て」という命令が定言的に、あるいはそのような命令の帰結として与えられると構想されていたことは確かである。

「（将来にわたって、全体として）自らと他者に関心を持て」という命令は、自他の善き生に配慮すべきことを含意する。そして、善き生に寄与するがゆえに、内在的価値を実現すべく客観的価値を目指すことは合理的である。ルイスの示すこの道筋は、定言的命令の内容と客観的価値の内実を明示する点で、メタ倫理学の範疇を超え出て明らかに規範倫理の領域に踏み込んでいる。

４．ルイスの認知主義・自然主義的実在論の評価

倫理学に関するルイスの議論は十分に知られておらず（Dayton 2006, 18; Misak 2013, 185）、彼の主張そのものに対してはほとんど検討がなされていない[12]。そのため以下では、認知主義・（自然主義的）実在論に対する一般的な批判を取り上げ、ルイス的な応答を考えることで、彼の議論の成否を占うことにする[13]。

４．１　相対性からの錯誤説論証

まず検討したいのは、マッキーによる相対性からの錯誤説論証である。錯誤説は、道徳判断は真偽値を持つとする認知主義を前提として受け入れた上で、道徳的事実は存在しないと主張することで、道徳判断はすべて偽であることを導く。「相対性からの論証（the argument from relativity）」は、次の論証によって道徳的非実在論を導く。【前提 1】もし道徳的事実が存在するなら、それは私たち一人ひとりの主観や一つひとつの共同体から独立しており、万人にとって共通であるはずである。【前提 2】しかし、道徳は社会や時代、集団や階層によって現に異なっている。【結論】したがって、道徳的事実は存在しない（Mackie 1977, 36–38）。この論証の中でマッキーは、科学的判断の相違は推論の不確かさや証拠の不十分さによって説明されるため、科学的対象の非実在論を支持しないと主張し、道徳判断

と科学的判断の差異を強調している（Mackie 1977, 36）。

ルイスならこの論証に答えて、まずはこう言うだろう。道徳判断の相違は実際以上に誇張されて見えるのであると。第2節の終わりで見た通り、ルイスによれば、価値判断の違いは他の経験的判断の違いに比べ発見されやすい（AKV 418–419）。これは前提2に対する部分的な疑義である。しかしより重要なのは、道徳が現に相違しているなら道徳的事実は存在しないとする前提1の方である。ルイスの立場からは、この前提は誤りであると言える。というのも、価値判断の相違は、科学的判断のような他の事実判断の場合と同様に解釈できるからである。（客観的）価値とは経験において内在的価値が実現する可能性、究極的には善き生に資する可能性のことであり、自然な事実として存在する。それにも関わらず価値判断が相違するのは、そうした可能性に関する正確な判断は極めて困難であり、検証が完了することのない非打ち切り判断だからである。この点で価値判断は本質的に科学的判断と変わらず、その相違も同様に解釈することができるのである。

４．２　発生論的暴露論証

マッキーによれば、道徳判断は道徳的事実の認知というよりも、現に通用している道徳規範の是認としてよりよく説明される（Mackie 1977, 36–37）。より一般的に言えば、道徳判断は道徳的事実とは無関係の事情に基づいてなされているという洞察がここに看取できる。この洞察を洗練させ、道徳判断に関する懐疑論を導くのが、発生論的暴露論証（genealogical debunking argument）である。暴露論証は錯誤説と同様に認知主義を前提とする。ただし、錯誤説が「すべての道徳判断は偽である」と真偽について主張するのに対し、暴露論証から導出されるのは「すべての道徳判断は正当化されない」という正当化状態に関する帰結である。

暴露論証には様々なバリエーションがあるが[14]、ここでは代表的な例として、信頼性主義（reliabilism）を前提とするジョイスの論証に基づいて説明する。ジョイス型の暴露論証は【前提1】信頼性主義、【前提2】判断形成プロセスの説明、【前提3】阻却事由（defeater）の提示の3点を前提として、【結論】道徳判断の懐疑論を導く（Joyce 2006, 211–215）。まず信頼性主義とは、判断の正当化条件に関する一つの立場であり、判断が正当化されるのは、その判断が信頼性の高い、つまり真なる判断を生み出す傾向を持つプロセスから生じるときであると主張する[15]。次に判断形成プロセスの説明とは文字通り、あるタイプの判断がどのようなプロセスから生じているか説明することである。例えば、道徳判断は自然選択のプロセスによって形成されると主張されることが多い（cf. Joyce 2006, Street 2006）。最

後に阻却事由とは、そのようなプロセスが信頼できないことを示す証拠である。例えば進化のプロセスの場合であれば、道徳的事実ないし道徳的真理を前提せずとも適応度によって説明可能であり、信頼性が低いと言われる。

前提 2 として置かれる進化論的主張に対する批判は少なくない（cf. Levy and Levy 2018; Isserow 2019）。しかし、例えばマッキーが現状追認という異なる説明を与えているように、前提 2 としては様々な種類の経験的主張を用いることができる。哲学的に、またルイスの観点から問題になるのは前提 3、特に一見して道徳的事実に関係のないプロセスは信頼できないという主張である。ルイスの議論に則るなら、この主張は常に成立するわけではない。価値判断のプロセスは、少なからず道徳的事実と関係していると想定できるからである。ルイスの自然主義的実在論において、道徳的事実は客観的価値、そして善き生として措定される。確かに自然選択のプロセスや現状追認のプロセスは、常にそうした価値を目指すよう導くわけではない。生殖によって自らの幸福が犠牲になったり、自他を害する理不尽な規範を支持して、その再生産に加担したりする可能性は容易に考えられる。しかし、これらのプロセスは常に価値に反したり、価値と無関係であったりするのでもない。むやみに他者と争わないことは内在的価値の実現に資するだろうし、同時に自然選択が誘導する行動様式でもあるかもしれない。通用している道徳規範が構成員の厚生に貢献するようなものであれば、それを受け入れることは善き生に寄与するだろう。ルイスの枠組みにおいて、ある特定のプロセスから価値判断ないし道徳判断が生じているという事実は、他の証拠と組み合わせて判断の検証に動員できる証拠の一つとして位置づけられる。このため、プロセスに関する事実によって、あらゆる道徳判断の正当化可能性を排除することはできない[16]。

４．３　規範倫理へのコミットメント

以上が潜在的な批判への、ルイスのメタ倫理学説からの可能な対応である。こうした応答を可能にしているのは、客観的価値とは内在的価値の実現可能性であり、内在的価値が善き生に貢献するがゆえにそれを目指すべきであるという規範的な主張である。こうした規範倫理へのコミットメントを持つからこそ、道徳判断の相違を終わることない検証過程の一段階として理解できるのであり、判断形成プロセスの道徳的事実に対する証拠関係を期待することができるのである。

５．規範倫理

ルイスのメタ倫理学説は客観的価値と定言的命令の内実に踏み込むことで、

種々の批判に応え得る。これが前節の洞察である。つまり彼の認知主義・自然主義は、その妥当性の根拠として、規範倫理上の主張に多くを負っている。したがって、ここで彼の規範倫理学説の成否が問われなければならない。しかしこれには困難が伴う。というのも、ルイスの規範的主張の核心は、「自他の生に配慮せよ」という命令が定言的に、あるいは定言的命令の帰結として与えられる点にあるが、この選択が適切であるかどうかは、継続的な探求の中で検証されていくよりほかないからである。彼の規範倫理を評価する礎となることを期待しつつ、以下では暫定的にこの定言的命令を受け入れ、彼の規範的主張の含意を明らかにする。

「善き生」を中心に据えるところから予想される方向に反して、ルイスは功利主義と距離を置いているように見える（cf. Misak 2013, 190）。これは規範の根拠を定言的命令に求めるカント的色彩を帯びた構想のためでもあり、またベンサム、ミルら功利主義者への批判のためでもある（AKV 376, 398, 403–405, 488–495）。しかしルイスの功利主義批判は、彼の立場と功利主義が、それらの比較を可能にするような地平を共有していることの裏返しでもある。そこで以下では、功利主義の中心的なテーゼに対する距離の取り方を見ることで、善き生に始まる彼の規範倫理構想が行き着く先を素描する。

功利主義は標準的に、帰結主義（consequentialism）、厚生主義（welfarism）、総計主義（aggregationism）の 3 つの主張へと分析されるが（cf. Sen 1979）、ルイスが明示的に矛先を向けるのはこのうち総計主義、すなわち帰結の評価にあたって参照される関係主体の厚生は加算集計によって求めることが可能であり（集計可能性テーゼ）、その集計した値を最大化すべきである（最大化テーゼ）という主張である。彼は、生の善さは経験された内在的価値の総和に還元できないと述べ（AKV 486）、このことを豊富な例によって示している。特に重要なのは次の 2 つである。

> **例 1：**たとえ生を構成する経験がほとんど同等であり、生起する順番が異なるだけであったとしても、悪く始まってよく終わる生は、よく始まって悪く終わる生よりも善いだろう。（AKV 488）

> **例 2：**ある男が物乞いのカップに 1 セントを入れた。これによって彼は大きな満足感を得た。しかし後に、彼は物乞いが自分より多くの収入を得ており、彼の入れた 1 セントは豪奢な生活の足しにされていたと知る。このとき彼の満足はちょっとした悔しさに変わるだろう。（AKV 501）

これらの例によってルイスは、善き生を時点ごとに経験される内在的価値の総和に還元することの困難さを示している。

しかし、各例において還元を難しくしているのはどのような事情か、そしてルイスが善き生と内在的価値の関係についてどのような積極的な主張を有しているのかは曖昧である。ここではヴェルマン（Velleman 2000, 60 n11）が挙げる 2 つの解釈に 1 つを加え、3 つの可能性を検討したい[17]。第一に、生における出来事の並び方が、生全体の価値に影響するという主張として解釈できる。例 1 は明確にこの主張を支持している。第二に、ある経験において実現された内在的価値が生全体の善さに貢献する仕方は、別の経験によって変容し得るという主張である。例えば例 2 において、もし男が物乞いの実態を知らないままであったなら、彼の慈善行為は彼自身の生が善くあることにささやかな貢献を果たしたことだろう。しかし実際には、1 セントを入れたときに実現した内在的価値が、彼の生をより満足なものにしているとは言いがたい。第三に、生の価値は瞬間的経験の継起に還元できない通時的な性格に依存するという反総計主義の主張として解釈できる。これは最も弱い主張であり、先の 2 つの主張のうち少なくとも 1 つが正しければ成立する。ルイスは上記 2 つの例によってそれぞれ第一、第二の主張を裏付け、それによって総計主義、特に集計可能性テーゼに反対していると考えられる。

厚生主義、帰結主義に対するルイスの態度ははるかに微妙である。まず、ルイスは厚生主義の代表的なバリエーションである快楽説に対しては批判的である（cf. AKV 403–405）。彼の主な懸念は「快（pleasure）」「不快（pain）」という表現が持つ意味の狭さにあるが、このこと自体は単なる言葉遣いの問題とも言える。重要なのは、行為の是非を決定するのはその行為が影響する生全体の善さだと彼が考えている点である。総計主義への批判を通じて示しているように、生全体の善さは実現した内在的価値の総和に還元できるものではない。そのため行為評価に際して参照されるべき帰結は、その行為が引き起こす個別の出来事に限られない。後に起こる出来事が過去の行為が生の善さに貢献する仕方を変容させる可能性があるため、仮にある行為が因果的に引き起こした個別の出来事がすべて明らかだとしても、その行為の評価が完了することはないのである。例えば先の例 2 では、物乞いに施しを与えた男の行為の評価は、既に 1 セントが使われた後であったとしても、彼が物乞いの生活を知る前と後では異なるものになるだろう。こうしたルイスのアイデアは、近年「生の形状（shape of a life）説」として論じられる立場に近いものがある。生の形状説は、生の価値は瞬間的な厚生の総和に還元できず、全体としての価値が存在すると主張するが（cf. 長門 2019, 161）、これは

まさにルイスが先の例によって示していることに他ならない[18]。

おわりに

本稿ではルイスの認知主義・自然主義を提示し評価することで、プラグマティスト的メタ倫理学の新たな可能性を探ってきた。その過程で明らかになったのは、客観的価値とは直接に経験される内在的価値が実現する可能性であり、善き生に貢献するがゆえにそれを目指すべきであるという規範的な主張を伴うことで、ルイスの見解が魅力的なものになっていることである。さらに、善き生と内在的価値の関係をつぶさに見ることで、総計主義を否定し、全体として価値を持つ生を評価すべき行為の帰結に据えるひと捻りによって、彼が功利主義と距離を取りつつ独自の規範倫理を構想していることが明らかになった。ここには生の形状説に通じる洞察が含まれており、これは今日的にも関心を引くものだろう。もちろん、ルイスの規範倫理学を評価する仕事は依然残されている。しかし本稿の考察によって、「自らと他者に関心を持て」という定言的命令の検討のほか、功利主義を巡る論点からこの課題にアプローチする道筋が開かれることを期待している。

---

[1] セピーリはプラグマティズムのメタ倫理学が拒否する見解を「典型的実在論（typical realism）」と名付け、中心的なものから順に「正しさ（correctness）」、「領域外在性・領域一般性（domain external/general）」、「主観・客観図式（subject-object）」、「構造性（structure）」と列挙される5つの主張から成る立場として特徴づける。プラグマティスト的メタ倫理学の各立場は、構造性からさかのぼってこれらのうちどこまでを否定するかによって、ラディカルな立場から穏健な立場までに位置づけられる。ローティの静寂主義は「正しさ」を除くすべてを否定するとされ、比較的ラディカルな位置を与えられている。なお、ルイスの見解は扱われていない。

[2] 類似の試みとして、古典的プラグマティストとルイスの仕事からプラグマティスト的メタ倫理学の特徴を抽出し現代的含意を引き出したヘニーの研究が挙げられる（Heney 2016）。本稿ではルイス自身の洞察に注目し、また未検討のいくつかの論点から評価を行う。

[3] ルイスはAKV第3巻をあくまで価値一般の理論に捧げているが、価値について論じる際、「民主主義のために世界を安全にする」（AKV 368）といった優れて倫理的な目的を例示していることや、AKVの議論を一部先取りした論文「価値判断の客観性（The Objectivity of Value Judgments）」において、客観的価値の一種として美的性質（aesthetic quality）と並び道徳的価値（moral worth）を挙げている（Lewis 1970[1941], 166）点を考慮するなら、そこに倫理学への含意を見ることは許されてよいだろう。

[4] 単に経験に現れたことがらを報告しているだけである点で、表現的言明は「これは赤く見える」といった言明と異ならない。こうした表明は、経験に現れた性質を適切に表現する言葉を選べなかったり、発言者が嘘を付いていたりする場合を除けば、誤りの可能性を免れている（AKV 375）。

[5] ルイス自ら補っている通り、こうした発言がすべて表現的言明であるとは言えない。例えば、音楽に明るい人なら高く評価するだろう選曲である、食の好みがどのような人でも満足できるだろうメニューだ、といった判断を伝えることが意図されているのであれば、それは表現的言明ではなく、後述する価値の客観的判断として理解されるべきだろう（AKV 374）。

[6] 例えば「世界が安全になれば民主主義が実現するだろう」（cf. AKV 368）という予想など、その検証が実際には完了し得ない打ち切り判断もあり得る（Misak 2013, 187）。
[7] 前者の場合、対象は「固有の価値（inherent value）」を持つと言われ、後者の場合「道具的価値（instrumental value）」を持つと言われる（AKV 391）。例えば、おいしい料理は食べた者を満足させる潜在性を持つがゆえに固有の価値を持ち、よく切れる包丁はそうした料理を作る助けになるがゆえに道具的価値を持つ。
[8] このような価値判断は、もっぱら自らの経験における価値実現の可能性を参照する「一人称的（first-personal）」な判断に対して、「無人称的（impersonal）」な判断と言われる（AKV 530）。なおルイス自らが再三注意を促している通り、客観的価値がふつう他者の可能な経験を参照して決定されること自体は、「他者にとっての善さを実現するように行為すべきか」「最大多数が満足するよう配慮して行為すべきか」といった倫理的な問題に対する含意を持たない（AKV 394, 545–546）。客観的価値の判断はあくまで経験的事実の判断であり、第 3 節で見るように、価値を目指すことの規範性を説明するのは「定言的命令（categorical imperative）」である。
[9] この検証過程では、直接的な価値経験以外の証拠を使うこともできる。例えば、隣人が難解だが私の嫌いな曲を演奏するのを聞く経験は、「隣人は優れた音楽家である」との判断を支持するし、ノミで切った指の痛みはそのノミが鋭いよい工具であることの証左である（AKV 376–377）。
[10] ただしルイスは、「合理的（rational）」という言葉遣いに伴う混乱を避けるため「賢明な（sensible）」という表現を好んで用いている（AKV 366）。
[11] ルイスはここで「評価において、また思考と行為において整合的であれ」という命令も定言的であるとしている（AKV 481）。
[12] AKV の価値理論に対する貴重な批判として、同時代人であるモートン・ホワイトの論文（White 1949）が挙げられる。ホワイトの批判は、「価値は常に経験的知識の問題である。しかし、何が正しく（right）何が正当（just）なのかは、経験的事実のみによっては決定され得ない」（AKV 552）というルイスの主張に向けられている。ホワイトによれば、ルイスは知識を分析的なものと経験的なものに二分しており、もし倫理の問題が経験的知識の範疇を超えるのであれば、道徳命題はすべて分析的であるというおよそ擁護しがたい主張を受け入れざるを得ない。しかしガルシア（García 2018）が指摘するように、ホワイトの批判はルイスに特異なプラグマティックな「ア・プリオリ」概念の捉え方を見落としている。
[13] 本稿で取り上げることのできなかった論点として、ムーアによる「開かれた問い」論法からの自然主義的誤謬批判があるが（Moore, 1966[1903], 15）、これに対してはヘニーが事実と価値の二元論の否定に訴えてプラグマティストの立場から応答を試みている（Heney 2016, 101–103）。
[14] 暴露論証は判断ないし信念の正当化条件を前提とするが、用いられる正当化条件に従って分類することができる（笠木 2019）。信頼性主義を前提にする論証の他に、敏感性（sensitivity）条件や安全性（safety）条件を用いるバージョンもある。
[15] 信頼性主義は普通「信念（belief）」の正当化条件に関する主張として提示されるが、ここでは信念と「判断（judgement）」を区別せずに用いている。
[16] このルイス的な応答は、予め特定の道徳的事実を想定してプロセスが信頼できる可能性を確保する点で、暴露論証に対する「第三要因による説明（third-factor explanation）」（cf. Enoch 2010, Wielenberg 2010）と呼ばれるタイプの反論の一種と言える。
[17] ヴェルマンが挙げる候補は第一と第三の解釈である。彼はさらに他の例を引いて、他の出来事の記憶や予期によって、ある出来事において経験される内在的価値が影響を受けるという主張として解釈できる可能性を示しているが、この主張は総計主義と両立可能であると思われる。
[18] 生の形状説をめぐる議論において、ルイスの仕事はほとんど省みられていない。管見の限りでは、先に触れたヴェルマンが注釈においてわずかに言及しているのみである。しかし、ルイスの挙げる例のいくつかは、生の形状説の提唱者たちが用いる例と驚くべき一致を見せている。例えば一生を通じた幸福の量が上昇曲線を描く人生と下降曲線を描く人生を比べるノージック（Nozick 1989, 100）やテムキンの例（Temkin 2012, 111）は、ルイスの例 1 と同趣旨である。またカウッピネン（Kauppinen 2012, 348–350）の「単なる幸運（Sheer Luck）」によって成功した人生と「勤勉（Hard Work）」によって成功した人生の例にも類似例が見いだせる（AKV 486–487）。

［参考文献］

Lewis, C. I. (1929) *Mind and the World-Order: Outline of a Theory of Knowledge*, Charles Scribner's Sons.
Lewis, C. I. (1946) *An Analysis of Knowledge and Valuation*, The Open Court Publishing Company.
Lewis, C. I. (1970) *Collected Papers of Clarence Irving Lewis*, eds. J. D. Goheen and J. L. Mothershead, Jr., Stanford University Press.
Lewis, C. I. (1970[1923]) "A Pragmatic Conception of the A Priori," in Lewis (1970).
Lewis, C. I. (1970[1941]) "The Objectivity of Value Judgments," in Lewis (1970).
Lewis, C. I. (1970[1950]) "The Empirical Basis of Value Judgments," in Lewis (1970).

ジュリアン・バッジーニ, ピーター・フォスル. 2012, 『倫理学の道具箱』, 長滝祥司, 廣瀬覚訳, 共立出版。
Dayton, E. 2006. "Lewis's Late Ethics," *Transactions of the Charles S. Peirce Society*, 42(1), 17–23.
Enoch, D. 2010. "The Epistemological Challenge to Metanormative Realism: How Best to Understand It, and How to Cope with It," *Philosophical Studies*, 148(3), 413–438.
García, V. P. S. 2018 "A Review of Morton White's Criticism concerning Clarence Irving Lewis' Theory of Valuation and Normativity," *Cognitio: Revista de Filosofia*, 18(2), 259–272.
Heney, D. 2016. *Toward a Pragmatist Metaethics*, Routledge.
Isserow, J. 2019. "Evolutionary Hypotheses and Moral Skepticism," *Erkenntnis*, 84, 1025–1045.
Joyce, R, 2006. *The Evolution of Morality*, The MIT Press.
Kauppinen, A. 2012. "Meaningfulness and Time," *Philosophy and Phenomenological Research*, 84(2), 345–377.
笠木雅史. 2019. 「進化論的暴露論証とはどのような論証なのか」, 『メタ倫理学の最前線』, 蝶名林亮編著, 勁草書房, 183–216.
Levy, A., and Levy, Y. 2018, "Evolutionary Debunking Arguments Meet Evolutionary Science," *Philosophy and Phenomenological Research*, 100(3), 491–509.
Nozick, R. (1989) *The Examined Life: Philosophical Meditations*, Simon & Schuster.
Mackie, J. L. (1977) *Ethics: Inventing Right and Wrong*, Penguin Books. （加藤尚武監訳. 1990, 『倫理学 道徳を創造する』, 晢書房.）
Misak, C. *The American Pragmatists*, Oxford University Press. （シェリル・ミサック. 2019, 『プラグマティズムの歩き方（上・下）』, 加藤隆文訳, 勁草書房.）
Moore, G. E. 1966[1903], *Principia Ethica*, Cambridge University Press. （泉谷周三郎, 寺中平治, 星野勉訳, 2010,『倫理学原理』, 三和書籍.）
Murphey, M. 2005. *C. I. Lewis: The Last Great Pragmatist*, SUNY Press.
長門裕介. 2019, 「価値の多元主義としての生の形状説」, 『エティカ』, 12, 161–177.
Pihlström S. 2005, *Pragmatic Moral Realism: A Transcendental Defense*, Rodopi.
佐藤岳詩. 2017, 『メタ倫理学入門』, 勁草書房.
Sen, A. 1979, "Utilitarianism and Welfarism," *The Journal of Philosophy*, 76(9), 463–489.
Sepielli, A. 2017, "Pragmatism and Metaethics," in *The Routledge Handbook of Metaethics*, McPherson, T., and Plunkett, D. eds. (2017), Routledge.
Street, S. 2006, "A Darwinian Dilemma for Realist Theories of Value," *Philosophical Studies*, 127(1), 109–166.
Temkin, L. S. 2012, *Rethinking the Good: Moral Ideals and the Nature of Practical Reasoning*, Oxford University Press.
Velleman, J. 2000, *The Possibility of Practical Reason*, Oxford University Press.
White, M. 1949, "Value and Obligation in Dewey and Lewis," *The Philosophical Review*, 58(4), 321–329.
Wielenberg 2010, "On the Evolutionary Debunking of Morality," *Ethics*, 120(3), 441–464.